

北上山地北部の村落と住居

杉 本 尙 次

1 はじめに

山村は離島などと共に忘れられた存在となりがちである。特に近年人口の都市集中の裏側にある過疎現象が注目され、大きな社会問題となっている。本文は、「日本のチベット」といわれる北上山地北部（岩手県九戸郡山形村）の村落調査の小報告であるが、村の概況と、村落を構成する住居をとりあげる。調査資料は昭和39年の共同調査¹⁾と、数次にわたる岩手県下の巡検などを基礎としている。

山形村は東西約 20 km, 南北約 30 km, 面積 295.02 km² (大阪市の約 1.5 倍) の広大な山間村である。山形村の行政中心である川井と盛岡間は約 90 km, 国鉄バスで 4 時間を要する。この広大な村域に 13 の大字がある。予察によってこの中から霜畑・来内・荷軽部・日野沢の 4 村落を選んだ。(第 1 図)

霜畑は農業中心、来内・荷軽部は酪農化の最も

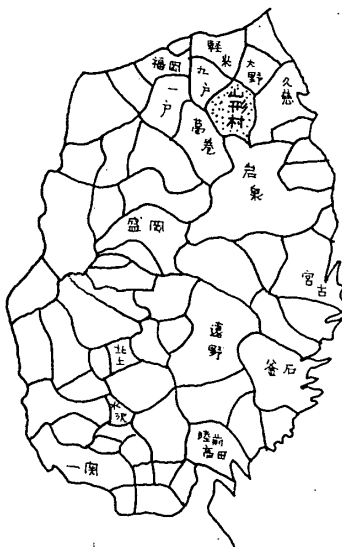
進んだところ、日野沢は林業中心で一部酪農を導入している。以上の 4 村落に地域中心的な川井部落を加えて考察した。

山形村全村落については統計資料の分析を行い、5 村落については面接聞き取り調査を実施した。

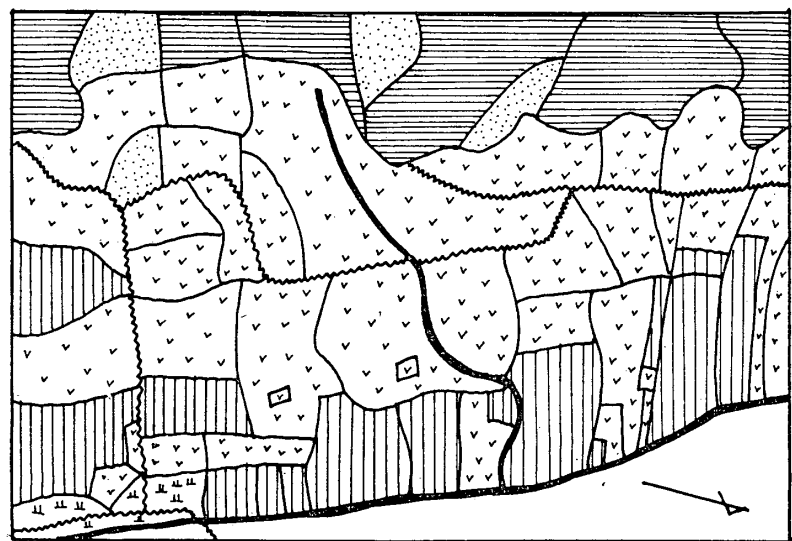
2 山形村の概況

山形村の産業別人口構成をみれば、第 1 次産業人口 83.0% (昭和 35 年国勢調査) で、岩手県 56.7% や北上山地北部の隣接地区と比較して、その比率が高い。兼業農家は 87.8% (昭和 38 年) を示し、経営面積をみても山林 71.4%, 採草地 21.4%, 畑 6.2%, 水田 1.0% であり、山への依存度が高い。山深い高原状の地形であるため耕地は小盆地や小河川流域に集まる。

地籍図によって土地利用をみると(第 2 図), 川に沿って僅かばかりの水田があり、宅地のまわりには畑地がひろがる。山の裾は秣場(採草地)が分



第 1 図 山形村の位置



道路 水路 宅地 田 畑 採草地 山林

第 2 図 土地利用の 1 例——地籍図(霜畑の一部)——

布し、それより高度を増すと山林となっている。村内の多くの村落では村の近辺で放牧は行なわず、採草地から飼料をとっている。ただ平庭高原一帯は良好な放牧場であり、山頂付近が採草地となっている。このように土地利用には二つの形態が指摘できる。

調査村落の土地利用も山形村全域と同様に、田

畑の占める割合は少なく、山林と採草地で80%以上を占めている。しかし霜畑では山林が50%未満であるのと、来内の採草地が60%を越えるのは注目される。霜畑の場合、谷がやや広く、一方来内は平庭高原に近く、高原状の地形であり、採草地が大きい。(第1表)

1戸当り平均耕地面積は1.2ha、普通畑が大半

第1表 <5村落の土地利用(昭38)>

	霜 畑	川 井	来 内	荷 軽 部	日 野 沢
山 林	561.3ha(49.2)%	2077.8 (82.3)	155.7 (24.3)	2809.3 (87.0)	1036.6 (75.6)
採 草 地	412.0 (36.0)	291.7 (11.6)	401.8 (62.7)	287.9 (8.9)	261.3 (19.1)
普 通 畑	138.4 (12.1)	140.5 (5.6)	76.4 (12.0)	100.8 (3.1)	57.4 (4.2)
田	30.5 (2.7)	11.7 (0.5)	6.8 (1.0)	29.1 (0.9)	15.4 (1.1)
樹 園 地	0.1 (0.0)	0.9 (0.0)	0.0 (0.0)	1.3 (0.1)	0.1 (0.0)
計	1142.3 (100.0)	2522.6(100.0)	640.7(100.0)	3228.4(100.0)	1370.8(100.0)

を占め、雑穀(ひえ中心)、豆類を主体とした土地生産性の低い後進的な段階にある。水田化は大正12年からみられるが、昭和33年以降「へき地開発法」に基づいた政府融資による土地改良区が開田され、急速に水田面積は増加している。しかし経営耕地面積に占める比率は12%と極めて低い。

米作に関しては冷害の問題も大きい。最近の大冷害は昭和9年・16年・20年であるが、特に昭和9年の冷害は甚大であった。この年の平年作に対する減収量の割合(凶作率)の分布をみると、最大は岩手県九戸郡の99%であり、80%以上の地域は岩手県の東半部となっている。近年品種改良などによって冷害は減少しつつあるとはいえ大きな問題として残るものである。

畑地では最近高冷地野菜や甜菜が栽培されはじめており、そのビートトップの飼料としての利用を含めて、従来の雑穀・豆類中心から酪農と関連した飼料作物栽培があらわれつつある。

畜産部門では、従来より役肉牛(短角牛)や馬の生産が主体であり、粗放な夏季山地放牧形態をとっており、自然に依存する面が強かった。昭和22年以来乳牛が導入され、昭和39年には乳牛飼育農家12%、乳牛飼育率2.2%を示すが、副業的段階を出ない。

「酪農立地調査」(岩手県)でも、県南部との対

比によって立地条件の不利が指摘されている。山形村の場合、冬季の交通障害、距離の問題、資金不足など多くの問題を内包している。乳牛飼育農家は階層的には1.5ha~3.0ha、すなわち中農以上に多いことを示している。調査村落別にみると、霜畑は乳牛がほとんど入っていない。短角牛の飼育が主であり、資金的、技術的に酪農導入に失敗したといわれる。日野沢は山林地主の解体による資金源の豊富さから(後述)、乳牛の導入が著しい。(第2表・第3表)

荷軽部は大山林地主を中核として、中農以上の農家で酪農が営まれる。来内は新しい開拓地といわれる。最近酪農が導入され、急激にのびている。地理的に地方中心の葛巻に接近している有利性もあろう。

山林は全面積の71.4%を占め、採草地を含めると90%を越える。林産物生産の変化をみれば、総伐採面積480ha(昭和36年)のうち、用材林185ha、薪炭林295haである。

昭和27年以来天然林の濫伐によって用材林が急減し、最近一般製材・パルプ材の人工造林が実施されつつあるが、山林の樹種の多くは製炭用にしか適さず、製炭は現金収入の中心であった。戦後、昭和22~3年をピークとして木炭生産は減少の一途をたどり、昭和36年には最盛期の1/4まで減

第2表 <家畜広狭別飼育状況(昭和39年, 山形村)>

広 狭 別 (ha)	総農家数	乳牛飼育 農 家 数	乳牛頭数	役肉牛飼育 農 家 数	役肉牛頭数	乳牛飼育率	役肉牛飼育率
0.3 未満	44	0	0	3	5	0	1.3
0.3~0.5	74	0	0	14	16	0	1.0
0.5~1.0	187	11	12	82	122	1.0	1.4
1.0~1.5	210	20	28	136	227	1.3	1.7
1.5~2.0	155	29	57	104	220	2.0	2.1
2.0~3.0	90	26	61	62	198	2.7	3.1
3.0 以上	15	6	30	8	19	5.0	2.1
計	775	93	188	409	807	2.2	1.8

第3表 <4村落乳牛飼育状況(昭和38年農基調)>

調 査 村 落	総農家数(A)	乳牛飼育 農 家 数(B)	乳牛頭数(C)	乳牛飼育率 $\left(\frac{B}{A}\right)$	乳牛飼育率 $\left(\frac{C}{B}\right)$
霜 畑	68 戸	2 戸	2 頭	3 %	1.0%
日 野 沢	51	19	40	38	2.1
荷 軽 部	87	14	41	14	2.9
来 内	57	19	31	33	1.6

少している。これは濫伐による原木不足からくる炭焼地の奥地への立地移動、現金収入をめざす出稼現象や離村からくる労働力の不足、そして特に燃料革命による木炭需要の減少が大きく影響している。木炭による収入の減少が酪農導入の一因ともなっているといわれる。

山形村の山林面積は九戸郡の中で最も広く、70%が私有林、26%が国有林である。山林の所有関係は各村落でそれぞれが特色をもっているが、50ha以上所有する戸数は30戸で山林所有戸数の6.8%、山林の74.2%を占めており、中でも1000ha以上の大山林地主が5大地主として君臨し「ダンナ」「地頭」などとよばれている。無所有または小所有の村民は「山名子」となり、全生活を含めて身分的に隷属し、庇護・奉仕の封建的な村落社会を保存²⁾しているところに大きな特色がある。神谷慶治監修「日本の山村問題」によれば、『これは単なる庇護による林野利用ではなく、「入会権」に基づくものであるが、大正初期の商品経済浸透の過程で、農民のエネルギーを結集した「共有権確認」の争議が「共有の性質を有せざる入会権」と判決され、かつ強制的に調停和解させられ

た、これによって、この関係は固定化してきたのである』としている。

このような山林の後進的所有関係は解明すべき重要な課題であるが、調査では住居における大きな差が把握できた程度で、詳細な調査が不可能であった。ただ調査村落についてみると、来内や荷軽部では大山林地主が所有しており、とくに荷軽部のO氏は5大山林地主の中でも上位にある。一般の農家では多くて20ha程度である。

日野沢は入会権に関する争議によって山林地主が敗れたため、大山林所有が崩壊し、1戸当り50ha前後の山林を所有している。霜畑は国有林が80%を占めており山林地主はいない。このような山林の所有形態は各村落によってかなりの差異がみられるが、これは村落社会の構造をはじめ農業経営面にも格差をもたらしている。

山形村の人口は大正9年4300人から昭和35年7312人に至るまで増加を続けたが、その後減少し、昭和40年には6573となり、10.1%の減少となった。人口流出は中卒者が中心であるが、出稼による流出も多い。中卒者で村に留まるものは昭和35年の30%から40年には10%に減じ、村に留まった

* 川本忠平ほか岩手大学『山形村総合調査要約——その基本的指針』(昭和36年)

- * 山村振興調査会特別調査「北上山系山村のすがたと進路——岩手県九戸郡山形村——」(昭和40年) 神谷慶治監修『日本の山村問題』所収(東大出版会, 昭和42年)
- * 明大社会学研究部編「山林地主を中心とする村落構造の一事例(岩手県九戸郡山形村繫)」(昭和35年度実態調査報告, 昭和36年)
- 2) 神谷慶治監修『日本の山村問題』p. 156(東大出版会, 昭和42年)
- 3) 註2)前掲書 pp. 162~163
- 4) 自治省財政局編『後進地域と辺地のための対策』pp. 74~98, (地方財務協会, 昭和38年)

3 村落と住居

(1) 村落の立地と苗字

本地域の村落は北上山地の侵蝕のひだの細かな小盆地や、浅い谷の沢に沿って立地するものが多く、標高は約 250~400 m に位置している。ほぼ数戸が集まっており、小村 Weiler (hamlet) をなすものが多い。

概観的には、地域中心的な機能をもつ国鉄バス路線沿いの川井地区と関地区以外は前記のようにほとんど山村的な性格をもっている。関はかつて野田方面から沼宮内、盛岡へでる塩の輸送路であり、宿場町的なところであった。これが国鉄バス

の開通によって川井地区に地域中心が移動したのである。

調査村落の苗字分布状況をみると、村落との間に興味ある結果が得られる(第4表)。昭和39年調査の大字荷軽部部落の場合について苗字分布をみると、戸数 102 戸、苗字 38 種、1 苗字あたり 2.7 戸であるが¹⁾、苗字と村落名が同一のものが多くことが判る。第4表の苗字のうち、横葉・田代・小笠原・小田姓を除けば、ほとんど村落名として存在している。この傾向は、一般に谷が狭く戸数の少ない村落ほど著しい。小字別にみると、隔絶性の強い苅間沢は13戸中12戸が苅間沢姓である。また村落名と異った苗字でも、それを付近に求めると、村落名として発見できる場合が多く、これが分家などによって元の村落から移動してきたことが判る。しかもそのほとんどが、同じ谷に位置する隣接村落に限られている。このような村落名と一致した苗字は山形村内の他の村落にも多くみられる。これは山口弥一郎も指摘するように、自然的な発達過程として、開拓者が入植し、屋敷名や家の呼び名(屋号)ができ、それが村落の名や苗字ともなったものと考えられる。

第4表 <荷軽部における苗字と村落> (昭和39年)

村 落 苗 字	苅間沢	谷 地	落 安	室 沢	大 峰	八木巻	学 校	計
苅 間 沢	12							12
谷 地		4	1	4	2	1		12
落 安			6					6
火 石*						6		6
大 畑*		3	1		1			5
木 藤 古*			5					5
田 代	1		1	2		1		5
横 葉		1			2		2	5
八 木 巻						4		4
大 峰					3			3
小 笠 原		3						3
小 田		2		1				3
そ の 他*		10	4	1	10	7	1	33
計	13	23	18	8	18	19	3	102

[* 火石は八木巻部落、木藤古は落安部落にふくまれる。大畑は日野沢に多い。その他は2戸以下のもの。]

本分家^{おきない}を中軸とする血縁集団が多いが、下川井の長内・下斗米両家の状況についてみると、分家はほとんど同一村落内において行なわれ、本家を中心としてあまり遠くない場所に位置している。他の村落に移動する場合にも隣接村落が大部分である。

(2) 住居の屋根

住居の中で最も可視的なものは屋根である。屋根材料の場合、茅が半数を占め、桎葺がこれに次ぎ、新しい材料としてトタンが増加している。これは山間村の一般的傾向とみることができよう²⁾。

瓦葺は少数であるが、山林地主など上部階層に導入が目立つ。草葺屋根の形態は寄棟である。屋根の葺替えや新築は村落共同で行なう。これを「ヤドコ」とよび³⁾、農業労働における場合の「ユイコ」と区別している⁴⁾。

屋根葺替えは、各家の山や原野から茅を刈ってくるが、葺く時には各戸1人ずつ出て手伝い合う(ヤドコ)。秋9～10月頃茅刈りをし、4月頃に葺く場合が多い。屋根は麻稗の上に茅をふくのが古く、40年ほど前には麻を栽培したという。

新築の場合は、1戸に対する割当がきまっており、材料の集めかたから完成まで、毎日手伝う、屋根用の茅各戸2駄・縄100(100ヒロ)竿(ホケという)2本を持寄り、また助米と称して穀物若干および助金若干を出した。このことを「ヤドコノ

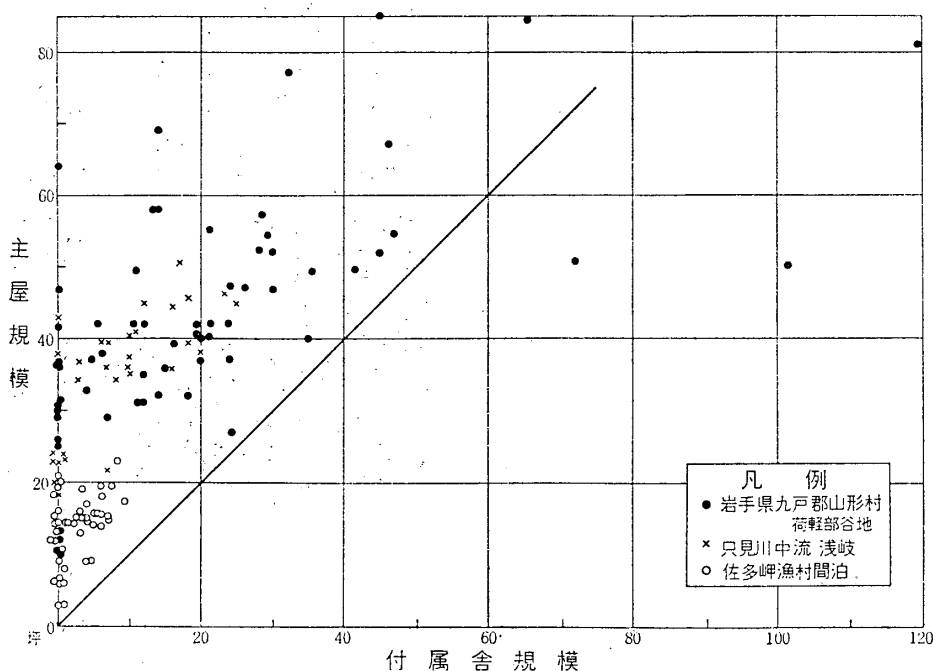
スケシキ」という。「ヤアガリ」(完成)の祝いもする。古くは、これらの共同作業がより強固であったらしく、江戸末期の新築家祝更細帳などによれば、手伝いや出勤日には○印がつけられ、菓子、茅を持寄っていることが詳細に記録されている⁵⁾。隣接の久慈近郊村における戦前の「ヤドコ」の記録もあり、村落結合の強さを窺わせる。このような共同作業の内容は、トタンに葺替えた場合など金に換算する場合があるといわれ、多少変化している。

昭和38年調査の只見川中流大谷川に沿う3村落の場合、屋根葺替えについてみると、上流の2村落は茅が豊富で、共有の茅刈場で自由に刈り取ることができるが、下流の村落の場合、総代に申告し、一定の金を払ってから茅刈りを行なうなど、上・下流で差がある⁶⁾。屋根葺の労力交換は「ユイ」というが、現在では3村落とも消滅し、屋根屋と家族労働のみで行なっている。北上山地が村落内結合の面で強固であるともみられる。

山形村では新築の際に家族の一時的に住む仮屋を建てるが、これが天地根元造りで、地床住居(土間)であり、原始的な小屋組として興味をひく。

(3) 直屋と曲家^{すじや}(住宅規模と間取り)

住宅規模⁷⁾をみると60%近くが20～40坪に集中し、一般に住宅規模は大きい。只見川流域の住居と比較した場合その傾向が明らかである。50坪以



第4図 主屋と付属建物との関係

第5表 <家屋：建坪数別戸数> 昭和39年（家屋個人別評価調および聞き取り）

部 落 名	80坪	70	60	50	40	30	20	10	10未満	計
霜 畑	—	4(2)	4(2)	8(2)	16(1)	17	16	16	4	85(7)
出 町	—	—	4	1	4	6	3	2	2	22
荷 軽 部	3(1)	1	4	13	27	27	16	7	1	99(1)

()内数字は曲家を示す。

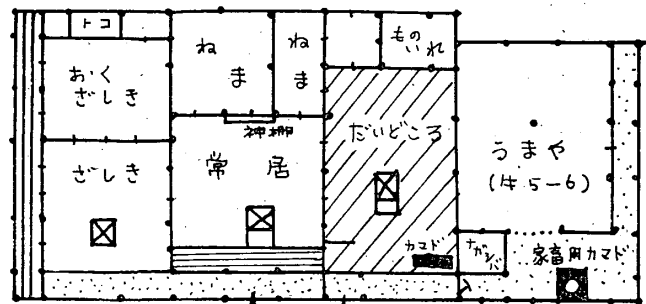
上のものが20%前後あり、荷軽部では80坪以上の壮大な家屋がある。これは大山林地主(ダンナ)の家であり、階層差が判然と示される⁹⁾(第4図)。住居の内部をみると、間取型は広間型であり、多くは厩を母屋の中に併置するウチマヤ式の直屋である。L字平面をもつ曲家は50坪以上の規模の大きなものが多く、家格表現形式ともみられよう(第5表)。全般的に直屋よりも曲家の方が規模の大きいことは、岩手県全般についても指摘されているところである⁹⁾。しかし北上川流域など平野部では直屋の場合ウマヤを別棟にしたものもあり、居住部分の広さは大差がない。近接の北上山村、下閉伊郡大川村大広部落の場合¹⁰⁾、経営耕地面積と住宅規模(坪数)との関係が明らかにされており、規模上位の4戸が曲家であること。1戸を除いて経営規模も最上位を占めている。

事例1(第5図 写真①) 直屋の例についてみると(山形村荷軽部八木巻, 八木巻氏宅)板張りの台所が広く、イロリが切られ、原始的な鋸歯状の木製自在鉤が吊してある¹¹⁾。近年カマドが導入されたため自在鉤はほとんど使用しなくなっている。「じょい」(常居)・「ざしき」「おくざしき」「ねま」には畳が敷かれている。「ねま」は北寄りにあり、常居・台所が広間である。家族員の生活の中心は台所であり、常居は接客兼居間である。神棚もあって、家の中心的な部屋である。「常居」と「ざしき」にはイロリがあるが、機能は火鉢またはコタツ程度である。常居(ジョイ・ジョウイ)という室名は岩手県中北部から青森県東部に分布している。

ウマヤは同一棟である。いわゆるウチマヤ式であり、台所に接着している。3×3.5間の大きなもので、土間には大きい釜や乾草置場がある。牛は5～6頭飼育しており短角牛である。

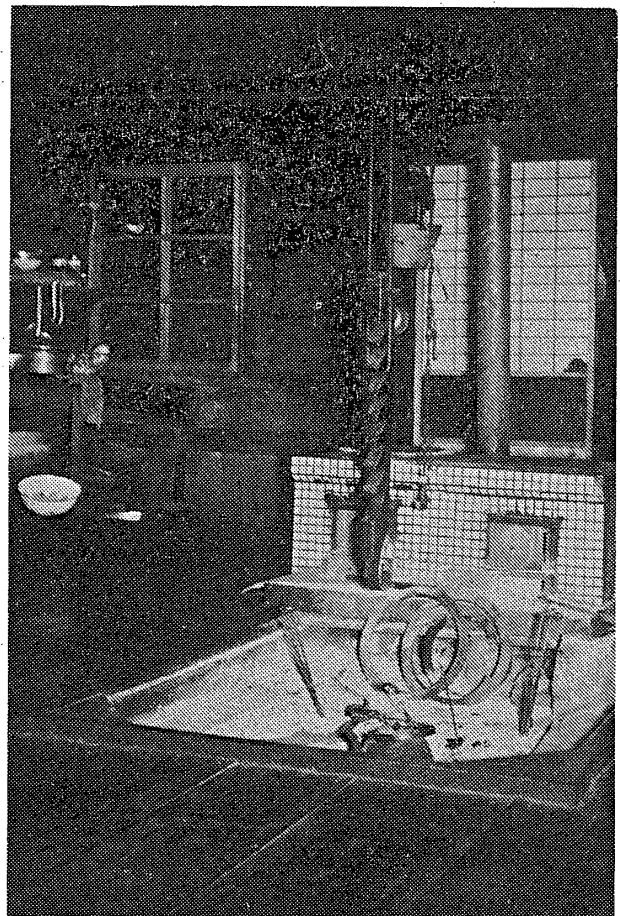
付属建物として作業場・土蔵・便所がある。

事例2 曲家の例についてみる。(山形村霜畑, 南野氏宅) 曲家で屋根はクレといって土をあげ草



0 1 2 向

第5図 事例1. (直屋) 山形村荷軽部八木巻



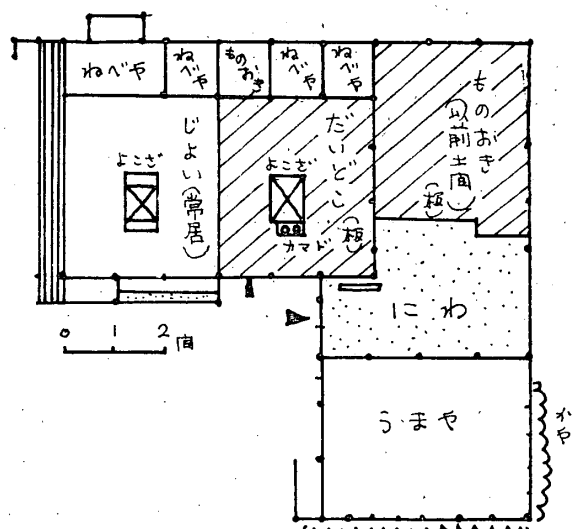
写真① 古い自在鉤と文化カマドの導入
(山形村荷軽部八木巻)

を植えている。このような棟飾りは北上山地北部や青森県東部に多く、関東山地にもみられる。

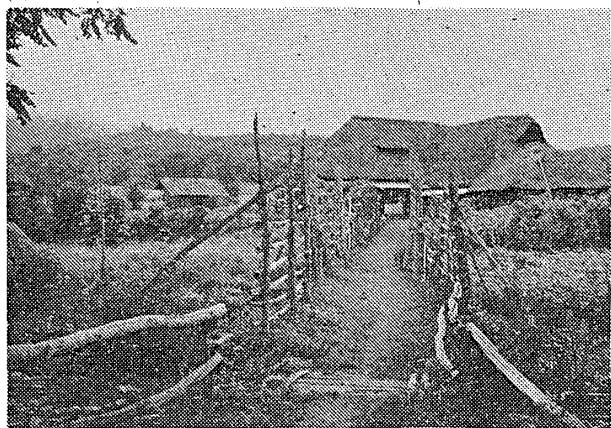
居住部分は、「じょい」(21畳)・「台所」(21畳)・「ね

べや」である。台所は板張りでイロリがある、ヨコザ、カタザなど座席を示す名称も残り、とくにヨコザを重視している¹²⁾。イロリ四周の名称は、ヨコザは共通しているが、同一村内でも名称に差がある。事例1からザシキ部分をとりさった形である。土間部分は現在 $\frac{2}{3}$ ほど床板が張られ、物置となっている。突出部は(3×4間)ウマヤである。この家では馬3頭ほど飼育している。

軒下を利用して茅を並べてあるが、これは雪囲いである。普通は12月に入って茅を並べる。4月中旬ころとりのぞく。付属舎は納屋、便所、風呂、井戸、木小屋がある。家畜は夏季は平庭高原付近に放牧するが、11月末から5月初旬までは舎飼である。土間では乾草を切り、切った乾草を土間の一面にある釜で濃厚飼料と共に暖めたり、湯をわかすなど、かなり土間が重要な機能をはたしている。冬季の寒冷な北上山地では別棟にすることは不便であり、これが、ウチマヤの多い理由と



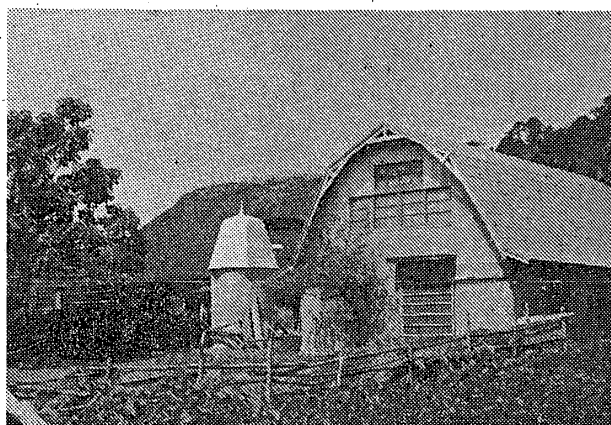
第6図 事例2。(曲家) 山形村霜畑



写真② 北上山地の曲家 (事例2の民家)
山形村霜畑

思われる(第6図 写真②)。

曲家は岩手県下に約1万戸といわれるが、山形村は分布の北縁部にあたっている。村内で現在19戸である¹³⁾。最近ウマヤを分離するよりも、ウチマヤ式の直屋に改造するものも多く、曲家の減少が著しい。とくに乳牛飼育農家で改造した例が多い。曲家の減少は、直屋に比べて谷の部分の腐敗の早いことなどを理由としてあげているが、酪農を導入した家では、飼育方法から厳重な衛生管理が必要であり、全部別棟にしている。腰折屋根の家畜舎やサイロなども目立つ。曲家は比較的経済的にも上位の階層に多く、酪農の導入がほぼ中農以上に多いことからみて¹⁴⁾、曲家の減少の主因を酪農導入と結びつけることも可能である(写真③)。

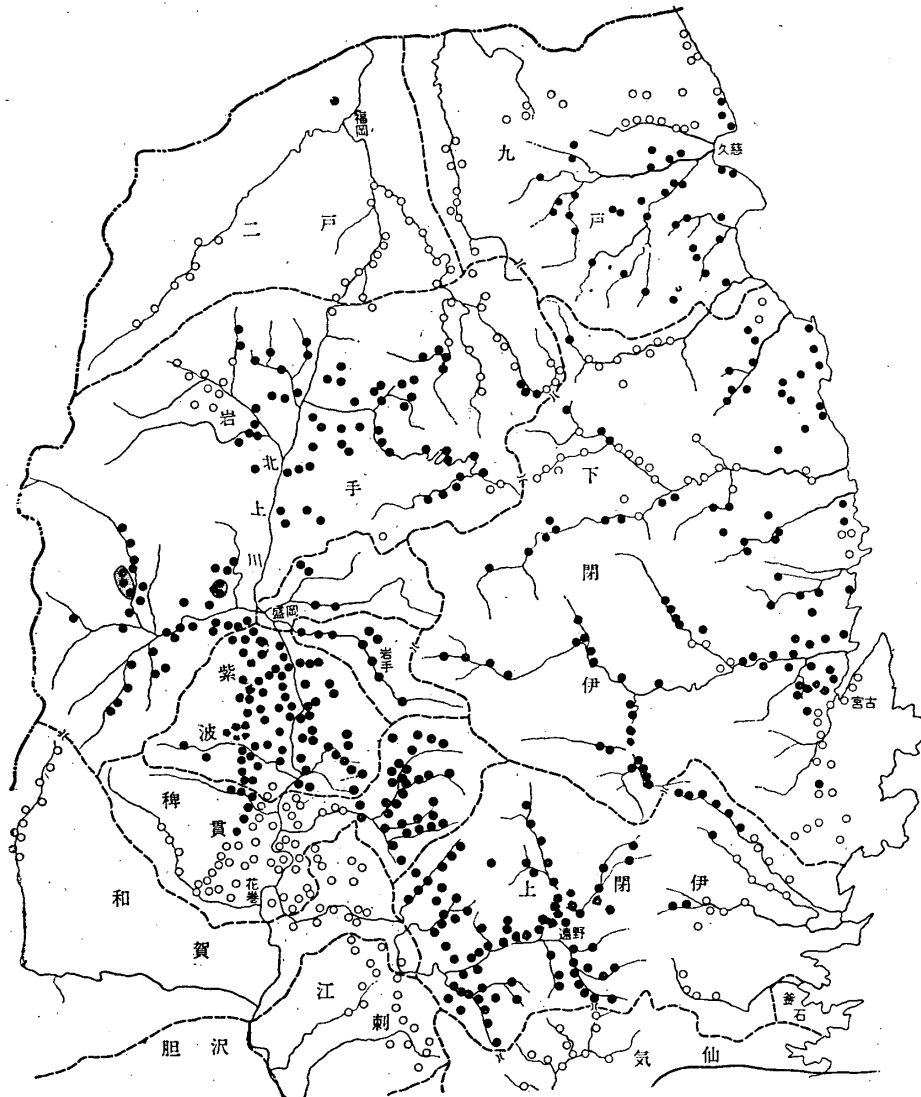


写真③ 酪農を導入した農家 (曲家の突出部を乳牛舎に改造、サイロをもつ)
山形村荷軽部谷地

(4) 曲家の分布

曲家の分布については、戦前では木内、大槻両氏による車窓からの調査や地形図による分布の研究があり、盛岡の村田孝介氏も実地調査と地形図記号により分布図を作成している。曲家そのものに関しても多くの研究があり、その成立過程や、封建遺制として本分家による規模の相違などを明らかにしたものもある¹⁵⁾。

分布については、曲家分布圏の一部分か、地形図記号によるもので、実地調査も併用しているが完璧な分布図は未完である。筆者の踏査も加えて、より完全に近い分布を検討する(第7図)。曲家は盛岡～日詰間、紫波郡(矢巾・煙山・水分・志和など)に稠密な分布をもち、稗貫郡の東部山地から上閉伊郡遠野盆地にかけてかなり分布している。特に遠野盆地東部に多い。曲家分布の北部は、北上川およびその支流に沿って分布し、沼宮内付



●：曲家のある集落 ○：曲家のない集落

第7図 曲家の分布 (村田孝介原図、筆者補充編図)

近までのびるが、二戸郡では激減し、県北の福岡町釜屋敷辺りが北限となっている。かつて津軽平野にも曲家が分布したが、これは南部藩領の住民が移った関係といわれている¹⁶⁾。

東へは、数は僅少であるが、平庭峠を越えて久慈川水系に分布し、久慈湾北部まで分布する。三陸海岸や北上山地にも散在するが、宮古—釜石間の海岸部には分布がみられない。南は赤羽根峠などに境され、気仙郡には分布がみられない。北上川流域では花巻と石鳥谷との中間が南限で、和賀・胆沢・江刺郡には分布しない。西は奥羽山脈が分布境界となるが、盛岡から西に雫石川沿いに山地へ分布がのび、一部仙岩峠を経て田沢湖周辺にのび、秋田の中門造と混在し、交界地帯をなしている。

曲家の分布圏は、ほぼ旧南部藩領と一致し、古

くからの馬産地であり、ウマヤの通風・積雪期の管理など、大型家畜飼育と気候との関連で形成されたものと考えられるが、特に分布周辺部においては峠や谷筋などを通じて分布圏が拡大されたこと。減少の激しさからみて、過去においては、津軽の例にみるように、かなり広い分布圏をもっていたこと、これが南部領域と関連があったことなどが考えられる。

(5) 曲家稠密分布地域——北上川中流平野部——の考察

曲家の分布稠密地域である北上川中流平野部の曲家について検討する。

盛岡南郊紫波郡は曲家の集中分布地域である。いま盛岡南郊日詰から西へ進んだとして、この付近の村落景観をみると、北上川氾濫原に防風林に囲まれた集村が立地している。大きな扇状地の末

端近い氾濫原のところどころ散村状の屋敷があり、分家が多い。本家は扇端に立地しているものがある。扇状地は緩傾斜のため、かなり水田化が進んでいる。扇状地面は河川が分流し、沢をなしている。ほぼこの沢に沿って分家がおこなわれ、散村状をなし、「えぐね」(屋敷林)に囲まれた曲家が多い。扇状地面では上から下へという分家の方向を示している。中には2〜3戸集まった小村状のところもある。本家は壮大な宅地と屋敷林をもったものが多い。紫波郡志和村では、888戸中353戸、約40%が曲家である¹⁷⁾(昭和28年)。日詰町小屋敷周辺では131戸中30戸(23%)(昭和39年)、盛岡近郊滝沢村篠木92戸中40戸(43%)(昭和41年)¹⁸⁾。

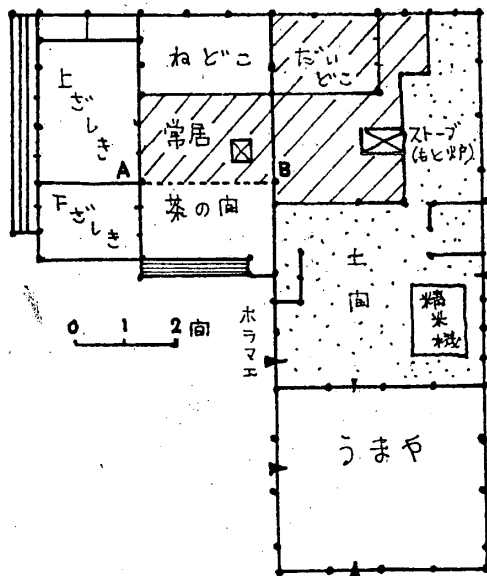
川本忠平氏は志和村の888戸の農家につき、畳間・板間・土間に三区分して、その規模を調べているが¹⁹⁾、この資料によれば、農家構造は一般に広い建坪面積を占め、経済的に中層以上の農家で

は建坪面積100坪前後と推定されている。主屋(母屋)の内部利用は、母屋総建坪に対して畳間17%・板間54%・土間29%となり、板間と土間の広い居住様式を特色としている。

事例3 (第8図写真④) 曲家(紫波郡水分村屋場) 主屋は寄棟、突出部は立派な破風をもつ入母屋である。「上ざしき」「下ざしき」「茶のま」「ねどこ」が畳敷、「常居」「だいどころ」が板間である。この家は、かなり改造しており、ふみこみ炉も改良してストーブになっている。イロリは「常居」にある。「茶のま」は、かつて「常居」と続いており、板間であったことが判る。台所もステンレス流しや、電気冷蔵庫が並び、土間はコンクリートがうたれ、精米機などがおいてある。ウマヤは突出部にあたり、4間×3.5間の広いものであり、「ホラマエ」という出入口には駒形神社の札が貼ってある。

付属建物としては腰折屋根の作業場をもっている。規模からみれば中位にあたる。東北地方では本分家による差がかなり大きいようである。例えば志和村で某大本家で宅地総面積1617坪、母屋・ウマヤの建坪125.2坪、付属建物85.7坪(土蔵・板小屋・木小屋・稲小屋・便所)、総建坪212.7坪となり、宅地総面積の約13%が建坪面積となっている²⁰⁾。

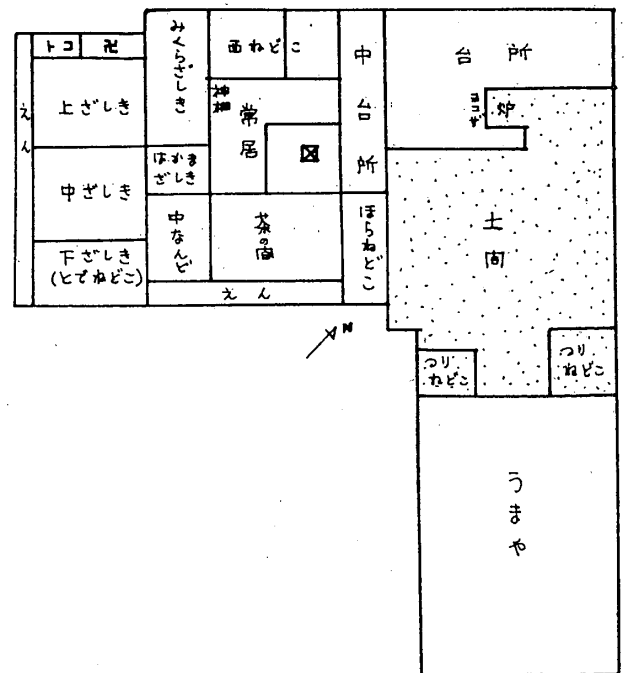
この宅地の中には屋敷神・墓・苗代などがあり、全部本家の宅地内に集積された感がある。特



第8図 事例3。(曲家)紫波郡水分村屋場



写真④ 盛岡南郊の曲家(突出部のウマヤ)
岩手県紫波郡水分村屋場、事例3の農家



第9図 紫波郡志和村 某本家
(川本忠平氏原図)

にウマヤを除く母屋内部をみると、畳間34%・土間30%・板間36%を占め、一般農家より畳間面積が広く、板間が縮小している。これは諸分家の会合など接客空間を広くとった関係と思われる。

座敷は上中下とあり、「みくらざしき」、「はかまざしき」、「中なんど」、「西ねどこ」、「常居」の一部分、「ほらねどこ」と多室で、以上が畳敷である(第9図)。

「茶のま」「常居」の一部分、「中台所」「台所」(イロリ)が板間である。現在はかなり崩れつつあるが、各部屋によって家族員の寝所にもきまりがあり、封建的家族生活を反映したものとみられる²¹⁾。

本家は孤立荘宅的であり²²⁾、立派な「えぐね」(屋敷林)は本家の特質を示している。分家には「みくらざしき」「ほらねどこ」「つりねどこ」「はかまざしき」「中台所」などが欠けており、さらに小規模な家では「ざしき」を欠くことになる。宅地面積も付属建物も縮小している。

このような本分家関係の強固さや同族組織の強さ、屋内への諸機能の集積は、寒冷積雪など自然条件と共に東北農村の大きい特色である。しかし近年これら諸関係は、農村社会の近代化と共に崩れて行く過程にある。とりわけ平野部では台所改善やカマドの導入などが進み、イロリに重点はあるものの、従来のイロリ中心から、カマド使用へと進みつつある。これは山間部にも波及しはじめている。

西日本その他諸地域と比較すれば、曲家も含めて母屋の中にウマヤを内包する率は高く、これが一大特色であるが、山間部に比較して平野部ではかなり曲家の改造がすすみつつある。しかし母屋を改造してウマヤを分離した場合でも廊下でつな

ぐなど、古い曲家のプランを現代に生かしているものが多いのであり、それぞれ地域に適した方法で改善が進んでいる(写真⑤)。



写真⑤ 曲家の改良型（新築家畜舎を廊下でつなぐ）盛岡南部

1) 戦前に山口弥一郎氏が山形村で調査された資料によると山形村685戸中、苗子が2661となり1苗字あたり2.6戸となっている。

山口弥一郎「北上山地の屋号と聚落」(『民族学研究』8の3, pp.85~111, (昭18))

2) 昭和38年調査の只見川中流大谷川に沿うる3村落の調査結果は第6表の通りである。茅葺が多いという点では山形村と共通している。瓦葺はみられないが、深雪地であることも関係がある。山形村の場合の瓦葺は山林地主など経済的に上層部の家である。

3) 東北では、草屋根の葺替えを「ヤドコ」と云う。「ヤドコ」という語には特に意味がある様に思われない。おそらくは「ヤドコ」すなわち家の行事という語からの変化であろう。

柳田国男, 山口貞夫『居住習俗語集』pp.293~294, 岩波書店(昭14)

4) 家の新築や改築の場合、まず部落の区長に申出る。区長は部落の協議にかける。部落各戸1人ずつ出て手伝うが、これを「ヤドコ」という。屋根の葺替えにも適用される。

5) 岩手県九戸郡山形村川合・長内栄七氏所蔵(写真⑥)。

岩手県教育会・岩手県立図書館所蔵『民家の研究』上閉伊郡や二戸郡の「ヤドコ」に関する詳しい記載

第6表 <屋根材料>

材 料	山 形 村 (昭39)			只見川中流大谷川流域(昭38)		
	霜 畑	出 町	荷 軽 部	間 方	浅 岐	大 谷
茅 葺	44 (52%)	9 (41%)	52 (53%)	28 (67%)	29 (94%)	48 (79%)
ト タ ン	9 (11)	7 (32)	25 (25)	8 (19)	1 (3)	4 (6)
桤 葺	20 (23)	5 (23)	20 (20)	6 (14)	1 (3)	9 (15)
瓦 葺	12 (14)	1 (4)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	85 (100)	22 (100)	99 (100)	42 (100)	31 (100)	61 (100)



写真 ⑥

がある。(昭和10年)

小久慈学区の364戸では、満20年になれば新改築の権利をもつ。364の各戸より屋根葺用の茅を2駄または苧穀(麻の茎)20束をもちよる。1日で葺きあげてしまう。その家では昼食(米飯・豆腐・汁・香物)を10時と3時に出し、タバコあるいは小間食(こあい、粥)などふるまう。祝物が多い。中流家庭の「ヤドコ帳」祝物合計は白米2石9斗・餅米3斗・ひえ6斗2升・粟5斗・白麦2斗2升・小麦1斗・大豆1斗・小豆1斗・トーフ31揚・酒4斗5升・縄26束・手拭14本・金銭6円70銭、その他にまわた、糸、下駄、ごぼうなど 戸数合計53戸

- 6) 只見川中流支谷大谷川流域：1月15日(新暦)に「サイノカミ」(スギの木2本厄年の人を出し、ボンテンを夜に燃やす。シマウという木に餅をさし、これを焼く) 最上流の間方部落は火災がおきたとのことで昔からない。浅岐は昭和37年から中止している。下流の大谷は昭和32年頃からやっていない。離村のため青年が少なくなったためかもしれない。なお間方の奥に戦前木地屋がいたとのことである。新潟方面(大白川)から「うるしかき」にやってくることもあり、越後との接触が考えられる。

- 1月15日に「ダンゴサシ」といって、ダンゴを鶴、亀の形などにつくり、ミツの木(冬になると赤くなる)にさし、「茶の間」の柱に飾る。その他ポンプ・土蔵・たねもみに供える。山の神講は現存している。輪番制である(浅岐)。2月12日、11月12日が山の神講。
- 7) 住宅規模を示すのに建坪は指標としてよいが、統計資料がない。町村によってもっているところもあるが、税務課課税台帳などでは、床面積で示す場合が多い。床面積も規模全般を推測する材料としては

重要であるので利用した。なお台帳は現地で照合してから使用しないと、帳簿記載はかなり古い段階のものが多し注意を要する。

- 8) 山形村荷軽部の山林地主小笠原通夫氏は当村最大の山林地主である。住宅(瓦葺、二階建)土蔵(トタン、葦葺各1)、物置(草葺、葦葺各1)作業場(草葺1)、車庫(葦葺1)、畜舎(葦葺1)、である。
- 9) 規模は曲家150~400 m^2 (45~120坪)、直屋は70~300 m^2 (21~90坪)これはいわゆる建坪であり、山形村の場合床面積であるが、曲家の方が一般に大きい。
*文化財保護委員会(伊藤延男・吉田 靖)『岩手県の民家』(1965)
- 10) 畠山 剛「岩手県の内蔵式住宅の曲家」(『農村建築研究会第7回大会資料』(その1), pp. 42~48, 1956)
- 11) 太い角材に鋸の歯のように段をつけて、その歯のところへ引っかけるような別の鉄棒を吊して上下できる。この自在鉤の形態は、アイヌの鉤にも類似したものがみられ興味を引く。山形村など北上山地北部のほか、青森県下の事例も報告されており(石原憲治)、三陸海岸南部にも及んでいたようである(現在消滅)。
- 12) 川合部落ではイロリ四周の名称は土間に向って正面が(ヨコザ)、左右が(カシキバ)と(カミザ)、土間側が(キジリ)。昭和25年にカマドを導入している。以前はイロリのみであった(上閉伊郡附馬牛村ではヨコザ、マギラザ、ケグラザ、木尻)。
- 13) 昭和39年8月現在における、山形村曲家の分布、(霜畑7・川合3・関1・小国1・来内2・荷軽部1・繋4・計19)
- 14) 第2~3表参照。大山林地主小笠原氏宅もかつて大きな曲家であったといわれる。
- 15) 曲家に関する主要文献
④木内信蔵、大槻高彦「南部曲家の分布、岩手県下の農家の形態並に経済に関する記録」(『地理学評論』18の11, pp. 73~70, 昭17)
⑤村田孝介氏の御教示による。
新潟大学須藤賢氏の指導による曲家分布の調査がある(菊池孝子)。これは屋根形式や分布限界の把握に努力しているが、交通線沿いのものに主力がある。
⑥岩手県教育会、岩手県立図書館蔵『民家の研究』(昭10)、(曲家の資料が収録されている)
⑦森口多里「いわて民家の屋根」(『民俗建築』28, pp. 1~4, 昭35)
森口多里「岩手のうまや」(『民俗建築』35, pp. 20~26, 昭36)
⑧伊藤延男「岩手県の民家」(『建築雑誌』963, pp. 8~9, 昭41)
⑨川本忠平「陸中紫波地方に於ける封建遺制の一類(第二報)一農家屋の間取りとその機能一」(『岩手史学研究』No. 14, pp. 43~50, 昭28)
⑩小野芳次郎「南部曲家」(『東北地方の民家』所収, pp. 181~195, 明玄書房, 昭43)
⑪草野和夫「耕馬飼育と農家」(『日本の農家屋』所収, pp. 141~153, 彰国社, 昭44)
⑫小倉 強「東北の民家」pp. 139~148, 相模書房, 昭30)
その他今和次郎『日本の民家』・石原憲治『日本農

- 民建築』・蔵田周忠『民家帖』・伊藤ていじ『民家は生きてきた』、日本建築協会編『ふるさとのすまい』など多くの文献で曲家がとりあげられている。
- 16) 石原憲治『日本農民建築』16, p. 32, (昭18), 南津軽郡光田寺村 (広間型・ウマヤ突出) 緑草会『民家図集』(6)「青森県南津軽郡六郷村三島・中郷村西馬場尻, 文安年間南部氏は津軽氏を侵略し, その領内の住民を津軽へ移住させたことがある。南部曲家が南津軽郡に分布するのは, その頃移したものといわれる」。現在ほとんど消滅しているが, 入口の雪よけ底などに古いタイプが保存されているとみられる。中門的な要素を考えることもできる。
- 17) 川本忠平: 註14) ④ 前掲書 pp. 44~45
- 18) 新潟大学: 菊池孝子調査
- 19) 川本忠平: 註14) ④ 前掲書 pp. 44~45
- 20) 川本忠平「陸中紫波地方における封建遺制の一類—第一報, 農家宅地面積とその機能—」(『地理学評論』24の9, 昭25)
- 21) 「みくらざしき」(祖父母)「下座敷」(戸主夫妻)
「西ねどこ」(血縁関係の女子および女中のネマ)
「ほらねどこ」(血縁関係の作男および2~3男)
土間側に格子戸 (馬の見張り)
「つりねどこ」(非血縁関係の作男のネマ)
川本忠平: 註14) ④ 前掲書 pp. 46~49
- 22) 村田孝介氏談
山口弥一郎・村田孝介「陸中紫波の屋敷と耕地」(『地理学評論』21の7・8, 昭22)